



震災から1年半、被災地は今



© 山田省蔵

水揚げ岸壁の長さ日本一（1,200m）を誇る石巻漁港（宮城県）だが、操業する漁船は震災前の3分の1とのこと。港湾施設や地盤沈下箇所の復旧工事が続くなか、復興までの道のりは、今だ遠く、険しい。

震災から1年半。「あの日」の記憶を留めつつ、それぞれの日々のくらしが積み重なります。岩手県・宮城県・福島県の今について、写真家の山田省蔵さんに切り取ってもらいました。（1~3ページ）



© 山田省蔵

夕暮れの中、作業は途切れなく続く。

「震災からの復興」と一言でいっても、それを測る物差しは多数あります。例えば、国道や鉄道などは9割前後の復興状況とされる一方、復興住宅の建設

は、その整備に着手した割合が15%にとどまっています。

まちづくりの前提となる土地区画整理を計画決定した地区も28%だけと、被災者が安心して生活できる環境には今だなっていません。

農地で営農再開可能になったのは38%、漁港も陸揚げ岸壁の機能が回復した割合が34%です^{*1}。

石巻漁港は、水揚げ量・水揚げ高ともに日本有数の大漁港です。江戸時代には伊達藩・南部藩の米の積み出し基地として栄えました。現在は貿易港や

ヨット係留地、離島フェリーの発着場としての役割も担う石巻漁港ですが、震災前に比べ、操業している漁船数および水揚げ量はともに34%、水揚げ高で40%となっています^{*2}。

復興が長引けば、産地間競争で後れを取ることも懸念されます。復興には、スピードも求められています。

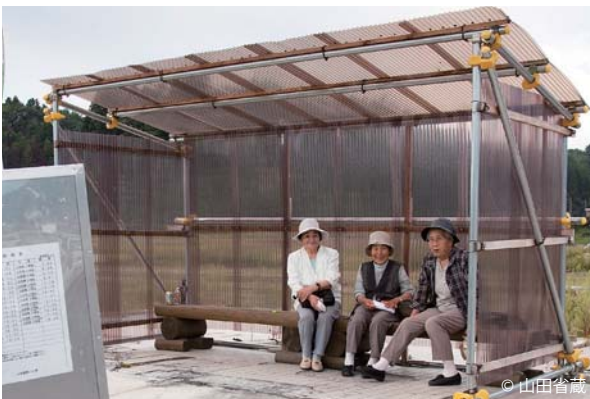
^{*1} 復興状況のデータは復興庁のHPを参照。
^{*2} 石巻漁港のデータは宮城県のHPを参照し、直近掲載数値の2012年4月と2010年4月の数値を比較したものの。

フォトルポ 被災地は今

岩手県山田町、宮城県女川町、福島県福島市

岩手県山田町（取材日：2012年9月15日）

震災時の津波とその後の火事により、約4割の家が全壊した岩手県山田町。町の動脈を担っていた陸中山田駅も、コンクリートの土台を残すだけです。その土台の上に設置されたバスの停留所で佇む3人の女性に声を掛けました。「ええ、この山田町の者です。祭りを見に3人でやってきました。震災の時はほんとすごかった。そして津波のあと



陸中山田駅跡に建てられたバス亭で祭りが始まるまで一休み。



山田町では震災の傷跡がまだまだ目立つ。中ほどのテントが祭り会場。

の火事。夜空が真っ赤になりました。今は、なんの楽しみもないんで、この祭りが楽しみ。去年もやったけど（規模が）小さかった…。（神輿を担いだまま）海に入るのは今年はないみたいだけど、ようやく祭りらしい祭りになってきた」
時おりの風が、祭りの準備を進める声とともに、新たな家を建てる槌音をバス停まで運んできました。

宮城県女川町（取材日：2012年9月14日）



高台にある住宅地と道を隔てて建っている仮設住宅（右）。



「きぼうのかね商店街」。木造の店舗棟はイギリスやアメリカの団体による資金援助を受けて造られた。

世帯数が3,440の女川町に、1,285戸の仮設住宅があります。中には、一本の道を挟んで今までの住宅と仮設住宅が向かい合う場所もあります。

同じ地域に住む住民同士、復興へ向け一緒にやっていこうという動きがある一方で、生活場面での意見や感情のすれ違いの話も聞きます。

今年の4月、女川高校のグラウンドに、仮設の「きぼうのかね商店街」がオープンし、壊滅した商店街の店舗のうち、その大部分（50店舗）が入りました。女川町で6つに分かれていた商店街が一つのところに集まったの営業となります。

昔なじみの店とともに、敷地内には郵便局や各種金融機関の支店もあり、女川町の人々の生活基盤がつけられました。

JR女川駅前にあった鐘が津波で流されたけれど、一つだけ音の鳴る状態で見つかったことに、この商店街の名前の由来があります。

一本の道が互いを隔てる境目になるのではなく、希望の鐘の音をともに鳴らし合う道筋になっていければと思います。

福島県福島市（取材日：2012年9月16日）

全国各地域に空間放射線量の測定機器が設置され、計測結果について文部科学省のホームページで公開されています。

福島県には、学校や公園などにリアルタイム線量測定システムが2,700台（福島市には368台）あり、憩いの場である公園や、人々が行きかう駅前などに置かれています。

福島県内外の住民で、東京電力福島第一原発事故により、



© 山田省蔵

福島駅前に設置されたリアルタイム線量測定システム（写真中央の白い機材）。



© 山田省蔵

2011年4月に、福島県から愛知県一宮市に引っ越してきた松山さん一家。避難してきた人と支援者との集いに参加した帰り道にて。

今までの生活を一変させられた人は多数います。福島県から県外へ避難した6万2,000人を含め、震災を理由に県外へ避難した人たちは、被災地全体で約33万人にのぼります。被災地への直接的な支援とともに、こうした広域避難者へのそれぞれの地域での支援も求められています（関連記事本号6ページ参照）。

インタビュー

「将来を見据えながら、『日常』の部分で支援を行なっていくことが必要です」

社会福祉法人中央共同募金会
企画広報部長
阿部 陽一郎さん



© 山田省蔵

阿部陽一郎さん。

（社会福祉法人中央共同募金会の入口にて）

中央共同募金会では、義援金の受付に加え、活動への支援金として、被災地の災害ボランティアセンターへの助成（100カ所余りに約8億円）や、震災直後に立ち上げた「ボラサポ（赤い羽根災害ボランティア・NPO活動サポート募金）」による支援団体への助

成（第8次決定までに2,005団体に約24億円の助成）など、震災支援の活動を行なっています。

その中で思うことは、最近、被災された方自ら、地域を復興させていこうという力が強くなっているということです。

私は、これから、「将来を見据えつつ行動する」、ということが大切なキーワードになってくると考えています。

先日、被災地を支援する助成団体有志で話し合い、「3.11 + 5」というキャッチフレーズのもと、発災5年後の将来を描き、そこを見据えながら連携・協働できないかという議論が出ました。

これからの支援のあり方を考えてい

くときに、一度、各行政が公表している「復興計画」に目を通すこともよい方法かもしれません。

今後は、復興のスピードを速めるために、NPOなど市民が主体的に行なう活動を支援するための基金を設置するなど、各県単位で制度を充実させることが大切です。

また、生協の皆さんは、被災された方をサポートするためにさまざまな活動をされていますね。被災地では、震災の風化をととても残念に思っています。ぜひ、震災を忘れないための仕掛けづくりや、また、何かしたいという組合員さんの声を、それぞれのくらしのレベルで実践できるような働きかけをしていただけたらと思います。

福島の子どもたち、遊びにおいで!

放射線量の低い地域で、のんびりしてもらおう、という「福島の子ども保養プロジェクト」(コヨット!)。全国の生協が企画をし、子どもたちを招きました。(開催順に紹介します)

福島の子ども保養プロジェクト in さっぽろ「北海道へ遊びに行こう! 夏休み大自然北海道ツアー」(7月22~26日、24~28日、7月30日~8月3日、8月17~21日: コープさっぽろ)

(担当者より) 北海道の自然や空気を満喫してもらおうと、北海道ユニセフ協会・東川農協と協力して企画を実施しました。企画に関わる募金も組合員から募り、1,300万円の善意の募金が寄せられました。4回で計110人の子どもたちが参加し北海道を楽しみました。北海道を満喫していただいたようで、「帰りたくない」「また来たい」との声が寄せられました。



福島の子ども保養プロジェクト in 神奈川「神奈川県・三浦ふれあいの村」(8月14~16日: 神奈川県生協連)

(担当者より) 国際協同組合年の本年、地域における協同組合提携を深めながら、また、「何か機会があれば私も協力したい」という多くの方の気持ちが集まり、今回の企画となりました。参加者は、8~12歳の子どもの福島の子どもたち29人、お手伝いいただいた方は約70人でした。子どもたちの喜ぶ姿を見て、改めて今後も支援を続けていきたいと、次回の春休み企画に燃えています。



「おいでよ! かながわ」(8月21~23日: 東日本大震災避難者連帯事業実行委員会(神奈川県生協連、連合神奈川、神奈川県労福協、Vネット、中央労働金庫神奈川県本部、全労済神奈川県本部))

(担当者より) 夏休みの楽しい思い出づくりをお手伝いする目的で実施しました。参加したのは福島県内の小学3~6年生までの子どもたち77人です。70人の教職員、学生ボランティアに協力いただき、涼しくなった夕方から定番のスイカ割りや花火大会を開催。キャンプファイアでは相模原市のゆるキャラ着ぐるみや地元歌手も飛び入り参加し、夜まで楽しく過ごすことができました。



福島の子ども保養プロジェクト in 埼玉「動物園・サッカー観戦他」(8月24~26日: パルシステム埼玉、さいたまコープ、生活クラブ生協、埼玉県生協連、医療生協さいたま、埼玉県ユニセフ協会)

(担当者より) 埼玉の魅力をいっぱい体験してもらおうと、サッカー観戦と東武動物公園、鉄道博物館の見学をしました。交流会では、ボランティアの学生との屋外ゲームや埼玉クイズ、花火大会で盛り上がりました。また、パルシステム埼玉・さいたまコープの食後のデザート作りも盛り上がりました。参加した親子78人は、夏休み最後の思い出をつくり、笑顔で帰途につきました。



「ラストサマーフェスティバル in 蔵王」(9月8~9日: コヨット! team 福大)

(担当者より) 福島大学では、毎週末行なわれている福島の子ども保養プロジェクトにもスタッフとして学生が参加しています。今回は、夏の特別企画として、福大生だけで企画・運営をしました。参加した小学校3~6年生の27人の子どもたちは、動物と触れ合ったり、キャンプファイアを楽しんだりして、スタッフと一緒にとても楽しい時間を過ごしました。



福島の子ども保養プロジェクト in しずおか「富士山へ行こう! 遊ぼう!」(9月15~17日: コープしずおか)

(担当者より) 自然の中でたっぷり遊んでもらおうと、福島県在住の小学校3~6年生22人を静岡県御殿場に招待。この企画のメインプログラム「ふじさんぽ」(富士山でお散歩の略)は、登るにつれ変化する自然の魅力と、下山時のダイナミックな「砂走り」が名物。子どもたちは、全身砂まみれになって富士山の自然を楽しみました。



志津川と京都に虹をかけよう

京都生協「海の虹プロジェクト」



京都の方(黄色いシャツ)からお土産を手渡される参加者。地元の人と話す機会が多かった。

京都生協では、震災後7回、宮城県南三陸町志津川に継続したバスボランティア活動を行ってきました。そこでできた、南三陸町の人とのつながりは、回を重ねるごとに強くなっていきました。

そんな中、京都生協は、8月17～21日の日程で、いつもボランティアに行っている、南三陸町子どもたちを京都に招くことにしました。募集にあたっては、みやぎ生協ボランティアセンターの須藤敏子さんや、宮城県漁協の佐々木憲雄さん、登米市の仮設住宅に住む松岡良奈さんなど、宮城の多くの人々が協力しました。宮城の地元FM局も何度も告知してくれました。京都でも、生協職員・組合員をはじめ、地元のさまざまな組織の総勢百数十人が運営に協力しました。

招待された26人の中学生は、自然の中で遊んだり、沢登りや地域の人との交流を楽しみました。過疎化が進む

村で、村を守るために奮闘する住民と話した参加者の一人は、「自分たちの学校も生徒が減って大変。町の復興のために自分も何かしたい」と思いを語っていました。



沢登りを楽しむ参加者たち。子どもたちの歓声が響く。

種蒔きした秘伝豆を自分たちの手で収穫

食のみやぎ復興ネットワーク「村田の秘伝豆プロジェクト」※

関連記事 本誌19号にて、種蒔きの様子を紹介しています。

※食のみやぎ復興ネットワークが進めるプロジェクトのひとつ。「地域農業の活性化」、「休耕圃場の復活」、「後継者が安心して農業に取り組めるための経済的支援」を目指し、取り組みが進んでいる。



収穫風景。秘伝豆は9月20日より、みやぎ生協店頭でも、販売が開始されました。

9月15日、宮城県柴田郡射野町の高橋寛さんの畑で、秘伝豆の収穫がありました。青々と茂った秘伝豆は、「村田の秘伝豆プロジェクト」を進めているみやぎ生協、卸会社、食品メーカーが、5月19日に一緒に手で蒔いたもの。

途中、生産者が、除草や、栄養が行き届くようにするための芯止め作業を行ない、無事に成長しました。

畑には畝ごとに種蒔きに参加した団体の名前が目印でついています。「実もふっくらだ」「枝豆ってこんな風になるんだ」。自分たちで蒔いた種の成長に顔がほころびます。刈り方を教える高橋保さんも、「普段は機械で刈るんだけれど、今日はぜひ皆さんの手で刈ってもらおうと思って、ちょうどいい具合に実るように育てたんだ」とうれしそうです。

収穫後は全員で豆もぎをしました。もいだ枝豆は生産者のご家族の皆さん

が、茹で豆とずんだ餅に調理。味の濃い秘伝豆の美味しさに舌鼓を打ちながら、収穫を祝いました。

秘伝豆は10月12日頃まで収穫できます。村田町の秘伝豆の旬はまさにこれからです。



秘伝豆の豆もぎする参加者。

地域間のネットワークで 避難者を支えていく

東日本大震災によって、全国に多くの方が避難されました。その数は、判明しているだけでも約33万人にのぼり、愛知県には、2012年9月12日現在、1,255人の方が避難されています*。

愛知県では、避難者をサポートするため、11年6月に「愛知県被災者支援センター」(以下、支援センター)を設置。その運営協力団体となっているコープあいちの取り組みと、地域連携の様子について紹介します。

※復興庁HPより

●連携の意味

2011年6月13日、政府の「新しい公共」事業費を活用し、愛知県からNPOが受託するかたちで「愛知県被災者支援センター」が発足しました。センターは、愛知県と名古屋市の災害ボランティア連絡会が、東日本大震災の直後に一体化し、連携と情報交換を開始した流れの中、より深いつながりをつくるため立ち上げられたものです。運営協力団体の一つであるコープあいち参与の向井忍さんは、「国難ともいえる災害に直面し、組織を超えて連携しなければならぬと感じた」と話します。

現在は、支援センターを中心とし、多くの団体がそれぞれの力を出し合っており、愛知県全体で避難者を支えています。コープあいちも、県や市が、企業や個人などからの支援物資を届ける方



©山田省蔵

「いっしょにやりますの集い」参加者と話をしている向井さん(写真右)。

法に苦慮していたときに協力を申し出て、生協のノウハウを生かし、物資を届けたり、被災された方から聞いた声を行政に報告してきました。

また、支援センターでは、さらにサポートを充実させるために、向井さんからの提案で、11年7月6日、「パーソナルサポート支援チーム(PS支援チーム)」を立ち上げました。「避難されている方が抱える問題は、人それぞれ。一人ひとりに寄り添った活動の必要性を感じた」(向井さん)ためです。

●避難されている方の現状

避難生活を送る人の悩みもさまざまです。避難者の中では、自分は被災者ではない、と感じ、被災者同士の交流会に出ることができない人もいます。

栃木県から家族で自主避難してきた井川景子さんも、こうした交流会に参加できない避難者の一人でした。自分たちは勝手に避難してきたのであって、津波や原発によって家を失い、どうしても避難せざるを得なかった被災者とは違う、という考えがありました。また、故郷を後にしてきたことへの引け目も感じ、苦しい思いを他人に伝えることができませんでした。

そんな中、向井さんや支援センター



©山田省蔵

「いっしょにやりますの集い」(9月9日)の会場。避難された方が集まり、それぞれの持つ課題を皆で共有し、解決するきっかけとしている。

から、「同じ思いの方もいるはずだから、自分が参加したいと思える会をつくってみては?」とアドバイスされたいいます。その言葉を受け、井川さんは、同じような境遇の避難者が気軽に来られるように、「ゆるりっと会」という交流会を立ち上げ、現在は同じ思いを抱えている人と一緒に活動を行っています。

●日頃のつながりを大切に

災害時には、行政と市民団体間の連携力が問われますが、普段のつながりが少なければ、いざというときも連携がとれません。今後の不測の事態に備え、日常レベルの関係づくりがとても大事になってきます。

また、生協、NPOなどの市民団体などは、自分たちの活動だけで自己完結しやすい傾向があります。各種団体が別々に行動すれば、同じような内容を避難者に何度も質問するなどし、避難者が心を閉ざしてしまう可能性もあります。向井さんは、「避難者の側に立った支援をするためにも、各団体が普段からの情報共有をするなど連携し、担当者同士が顔でつながれる関係を構築しておくことが大切になるのではないのでしょうか」と話していました。

「応援したいという気持ちで、注文数に表れました」



正月返上で生産者が除染した桃は、たくさんの組合員のもとに届けられた。

東海コープ事業連合では、店舗と宅配（8月第1週、2週、5週の計3回）にて、福島県産の桃を取り扱いました。宅配においては、当初の供給計画では、約6万5,000個を販売予定でしたが、結果、それを大幅に上回る約10万7,800個の注文がありました。また、桃を買った組合員から生産者へのメッセージも贈られ、「とてもおいしかった」、「除染作業、本当に大変でしたね」などの言葉が寄せられていました。

関連記事 本誌19号にて、東海コープの代表が、桃の生産者を訪問する様子を紹介しています。

赤武酒造からのメッセージ 15,994本達成しました！

関連記事 本誌17号にて、古館代表のメッセージを紹介しています。

一度はあきらめた酒造りですが、皆さんの応援でもう一度「清酒 浜娘」を醸すことが出来ました。震災から自分の気持ちを決める日まで辛く長い時間でしたが、**昨年**の5月、酒造りを決意してからは多くの皆様とお会いし、これから赤武酒造がどの様になりたいかを話し、聞いて頂きました。すべてを失った私に以前と変わらない、また以前以上のお付き合いをいただき感謝いたします。また、赤武酒造復興計画始動以来、多くの方とお会い出来、励ましと応援の**声**に感謝いたします。大槌町は震災前、15,994名の町民で賑わっておりました。震

災で多くの仲間が犠牲になりました。空高く旅立った親戚、友人、仲間にも、現在、頑張っている仲間にも飲んで頂きたい。この思いより「**浜娘 純米酒 復活**」を15,994本お届けしよう**と**決め活動してきました。そして本日（7月）23日に、15,994本目を出荷する事が叶いました。願いは叶う。そう信じて夢中で進んできました。お買い上げ頂いた皆様へ感謝を込めてご報告いたします。

ありがとうございます。今後も新しい目標に向かって前進し続けます。

赤武酒造（株） 代表 古館秀峰



復活した「清酒 浜娘」を持ち記念撮影する赤武酒造株式会社の皆さん。



震災前の大槌町の人口と同じ「15,994本」の販売を達成した「清酒 浜娘」。



「伝えたい被災地」

このコーナーでは、ライター荒川和巳さんが被災地に入り、見たもの、感じたものを、お伝えしていきます。

被災地支援には楽しいものも多い。「楽しくなくちゃ続かない」とは多くの関係者の言葉だ。

続けるために支援側もいろんなアイデアを出す。NPO法人レスキューストックヤードなどが中心となって企画された、震災復興応援企画ミュージカル「ゴーへ」も楽しかった。被災した宮城・七ヶ浜町の子どもたちを中心とする市民劇団NaNa5931による公演だ。「ゴーへ」とは地元漁師さんの言葉で、英語の「Go ahead」（前進）が語源だという。「悲しいときこそゴーへ、夢に向かってゴーへ……」。劇中歌の熱いメッセージに涙があふれた。

そして、9月9日は恒例の「目黒のさんま祭り」。岩手・宮古から獲れたてサンマ6,000尾が届けられた。いわて生協マリンコープDORAの店長が代表を務める復興支援団体「かけあしの会」も参加していた。「かけあしの会」の仲良しさんとも旧交を温め、サンマをお取り寄せ。そして、翌週は、宮城・気仙沼のサンマ。私もかなり楽しんでる。それもいいか、と思った。



目黒のさんま祭りの様子。

募金情報一覧

全国の生協では、東日本大震災復興に向け、さまざまな募金が行なわれています。日本生協連が集約している「つながろう CO・OP アクションくらし応援募金」や、被災生協が全国に呼び掛けて行なっている募金など、種類はさまざまです。9月25日時点での募金情報について、一覧にまとめて紹介します。

●つながろう CO・OP アクションくらし応援募金

募金先	目標額	取り組み生協数	募金額	募集期間
仮設住宅への灯油支援(終了)	60,000,000 円	40 生協	61,388,908 円	受付終了(2011年11月15日～2012年4月10日)
福島の子どもの保養プロジェクト	50,000,000 円	49 生協	45,754,749 円	2011年11月15日～2013年2月28日
学校図書館げんきプロジェクト	50,000,000 円	30 生協	36,544,735 円	2012年4月1日～2013年2月28日
あんしん福島募金	136,000,000 円	51 生協	41,360,138 円	2012年5月25日～2013年3月31日
指定なし		28 生協	46,209,868 円	2011年11月15日～2013年2月28日
合計	296,000,000 円	98 生協	231,258,398 円	

※学校図書館げんきプロジェクト…被災地の学校図書館に、本を贈るプロジェクト。

※あんしん福島募金…食品の放射線測定器 30 台、内部被ばくの検査装置 2 台導入のための募金。現在、3 台の放射線測定器導入済み。

詳しくは、<http://shinsai.jccu.coop/bokin/> にて。

●全国の生協が設置している募金 (詳しくは、下記「支援募集情報」をご覧ください)

・いわて生協「にこちゃん号」購入募金(2012年11月末まで)…連絡先:いわて生協組織本部 管掌理事・金子成子さん(019-603-8299)

※大阪いずみ市民生協、ならコープ、市民生協やまなしから計620万円、このほか5生協から協力の申し出がありました。

・食のみやぎ復興ネットワーク「宮城県漁協志津川支所、JA いしのまぎ」支援…連絡先:みやぎ生協・藤田孝さん(022-772-6141)



大阪いずみ市民生協からの募金贈呈の様子。

支援募集情報

○いわて生協:

- 被災地ツアー(観光を含んでも可能)、被災地ボランティアツアーの企画・実施
- 被災地のお母さんたちや福祉作業所などの復興応援商品の販売協力(宅配以外のイベント等での取り扱い協力など)
- 被災メーカーの商品や復興応援ギフトなどの店舗・宅配での販売協力

・中小仮設住宅の支援

連絡先は、いわて生協組織本部・小野寺真さん(019-603-8299 月～土 9:00～18:00)まで。

・「移動店舗車両購入支援募金」ご協力をお願い(11月末まで)

被災地への移動店舗車両を増やすため、募金をお願いいたします。6月から宮古市内で開始した移動店舗(1台)は多くの方から感謝の声をいただくとともに、他の地域からは「早く実施してほしい」という切実な声がたくさん寄せられています。7市町村に点在する315の仮設住宅、住宅は残っても買い物が不便な地域を回するには、最低でも6台は必要です。1台1,200万円を目標に募金を実施中です。ぜひご協力をお願いいたします。

連絡先は、いわて生協組織本部管掌理事 金子成子さん(019-603-8299)まで。

○みやぎ生協:

・ふれあい喫茶で使用する、お菓子(各地の名産品など)を募集しています。連絡先は、みやぎ生協ボランティアセンター(022-218-3880)まで。

○食のみやぎ復興ネットワーク:「宮城県漁協志津川支所」に漁船・船外機・フォークリフト・わかめ収穫用コンテナを、「JA いしのまぎ」に海水淡水化装置、いちごの出荷作業用のスーパーハウス(幅2.3m、長さ5.4m、高さ2.6m程度の大きさ)を贈るため、上記物品、あるいは、支援金を募集。連絡先は、みやぎ生協 藤田孝さん(022-772-6141)まで。

○福島県生協連:「福島の子どもの保養プロジェクト」の①スタッフ、②大型連休の保養受け入れ先募集。①は、1カ月単位で毎週末参加可能な方を。②のご提案は、企画(日程、募集対象者、募集人数、スケジュール、参加者負担額等)を明確にした上で、ご連絡ください。連絡先は、福島県生協連 根本喜代江さん(024-522-5334)まで。

(保養の企画、運営、費用は、主催者にご負担いただきます。ご了承ください。)

本号外部取材スタッフ:荒川和巳、野口武、早坂恵美、山田省蔵